

絵画製作の指導

お茶の水女子大学付属幼稚園

三才児

村田修子

三才児の造形活動への導入の経験

この一年間、三才児と生活してみて、本当に型にはまらない（この原因は年令が小さいため、家庭で型にはめようとしないことや、はめようと思っても幼児側が型にはめられる対象にまで発達していない、ということなどいろいろあるが……）好ましい感じであったのでこれを如何にして幼稚園という型にはめないようにしようか、ということと共に、都会生活という中で限られた素材の経験しかない幼児に、動きの大きい平面的でない、いろ

いろの材料を与えて経験を豊富にするということを大きい目標にした。

そうするためには、自分が幼なかつたときおもしろかつたり、うれしかつたり、楽しかつたり、好きであつたことをいろいろ思い出してみた。人間にはいろいろの型があつて、その中の一つに自分が幼なかつたときのことを非常によく覚えていゝ人と、前のことは全然覚えていないで現在を十分に生活している人であるが、私は前者の型に属し割合いに年の小さかつた頃に経験したときに感じたことを、その時の実感のまま思い出せる事柄がある。たとえば、例をあげるとまだ三才ぐらいのとき海岸近くに住んでいたので、砂地の庭に深い穴を掘つた親戚の子に肩までうめられてしまったとき、土の圧迫がひしひしと身を感じられたことや、海岸で大波に足をさらわれて波の打寄せるのと一しよに水の中にまるめ込まれた形になり、その中で目をあけて淡青く黄色っぽい水や泡を見ているうちに母の

足にふれて起こされたりしたことなどが、その時の砂の中、水の中での感覚とともによみがえってくる。よくいわれるように、子どもは作ることそれ自体がたのしいのだ、ということもたしかにそうであつたと覚えていゝ。何かいじっている間に「何を作る」というはっきりとした目的のないままに、くつつけたり、伸ばしたり、切りとつたりするそのことがやっているにつれてたのしくなつてきた。いらぬ箱にくぎをさしたり、そこに糸をかざげたり、ちがう箱をのりでくつつけたり、何でも手あたり次第にくつつけて次にどこにこれをつけようかと考えること自体がとても楽しかつた。

そういうことからして、三才児のようすを観察すると、それと同じようなことがしばしば見られた。たとえば、絵の具を扱つていゝるとき、筆から思いがけず下に落ちた一しずくを「しまった」と思つてそれを左右上下にひっぱつて何とかなるのではないかといじ



っている間に、そこにあらわれたものや、そうすることがおもしろくなり、次々と同じように画面に落とすはひろげていく、といったことがよくある。また、空箱を使って何か作る場合など、何を作る、ということなしに次々とくつつけたり重ねて高くするそのことがおもしろくて夢中になってやっているその途中々々で「何が出来た」といい、また少しくつつけては「何になった」と楽しんでる。

これには問題もあろうが、作ることをたのしみ「何のようになつた」と考え、更に一層そのものに近づけたり、すばらしいものにするために工夫する。こういう連鎖反应的な活

動は、創造活動を活発にする一つの手段であると思う。

こういうことから、昨年一年間は自由にも何でも作れるつみ木での遊びを活発にさせることにつとめた。しかも積木に加えてほかの材料、たとえば椅子とか木箱、大きいボール紙の箱、わり箸、ヒューズなど性格のちがうものを与えてみた。それらの材料に馴れてくるにつれて、使い方に応じてそれらをくつつけたり、立てたりする必要に迫られ、そのための工夫をし、その結果、のりでつけるとか、セロテープでつけて立てればよい、というような意見が出されて、新しい材料の必要性及びその使い方を自分たちの経験から得ていくという現象も出てきた。そのほか協同して作ることの大切なことを知らせるため、材料の使い方などで子ども同志が話し合ったりした場合には「相談して考えて作ったからとてもおもしろい」というように殊更にとりあげるようにした。そこで積木あそびなどは六人ぐらゐのグループでやられ、時にはそれが一つのグループであったり、時には友達と相談の上、二つまたは三つのグループになり、お互いのグループ間は関係をもちながら活発に遊び

が進められることが多かった。砂場でもこの傾向は殆んど同じようにあらわれていた。

また三学期のあるとき、絵の具で絵を書くときにもあらわれた。比較的大きい紙(不用の大阪のカレンダー)に一人一枚ずつ使って書く予定を立てた。(実際の観察ではひとり一枚は少しもて余し気味の人が多かった。)このとき二人の子どもが「これは大きいから二人で書こう」と相談し、書くものもちゃんと上の方は何と何を誰が書く、下の方は誰の受け持ちで何をかく、としばらく話し合ってから書き出した。その途中で片方があきるともう一人が「ここがこうじゃなくては」というようなことから「うん、そうだそうだ」とお互いに励まし合うような形になり、余り書くことのすきでない二人が三十分以上、あたりにかまわずつつけてしていた。教師側の意図によって協同して書くことはあるが、三才児の側から、相談から活動まで、自分たちだけでやられたことはたいへん珍らしい事だと思ふ。これも普段の遊び(特に積木あそび)の中でみんなदैいっしょに相談する、ということが身についてきた結果ではないかと思つてゐる。また、こうしてみんなदैいっしょにする、

ということは、自分だけでするというのではなく、意見を、みんなで持ちよる、というか、出しあうことになるので、自分ひとりというよりは広い創造工夫の経験を持つことになり、型にはめない、ということに役立つのではないかと思う。

またもう一つの目標としたいろいろの材料をいろいろに使って遊ぶ経験をするということについてであるが、常日頃感じていること、実際に観察したところでも遊びについての経験が狭く、しかも動きが小さいと思う。

砂場でよくやられる売りやさんごっこにしても小さいものを作って並べる、という程度のことが多い。それらも「先生は大きいから大きいケーキの方がうれしい」というような助言などによって、家庭では多く禁止されるであろう水を使ったりその他の材料を使って砂あそびの活動を一層大きく立体的にすることができると思う。

勿論、現在の東京という環境からして望む方が無理かも知れないが、現在あるものを何とか工夫したり、遊び方、使い方を考えれば或る程度大きい遊びに発展させることができ

るのではないかと考える。

絵を書くにしても、小さい紙ばかりより、大きい紙、いろいろの形の紙、色のついた紙などいろいろあることが望ましいといわれる。これと同じようなことで、また私が覚えている幼いときのことをあげてみる。私は黒い土の固まった地面に、よく何か書いて遊んだ。白い画用紙に、自分が思わない線や満足できない形が書いてしまっ、消すにせせすいやな思いをしたことに比べれば、何の気もねなしに自由に消せる地面は何とありがたかったことか。そして友達と相談して大きいやねのある家を書き、それぞれが何屋ということかばんとか売る品物まで書き、出来上ったらお互に買いにいく。売れたものは地面をこすって消す。こんな他愛のない遊びがたのしみで、太く書くにはこれ、細くかくにはこの棒というように、筆を選ばずといった弘法大師以上に棒をえらび、それらの道具を毎日大切にヒミツの場所にかくしておいた↓ことはより以上にたのしみなことであった。

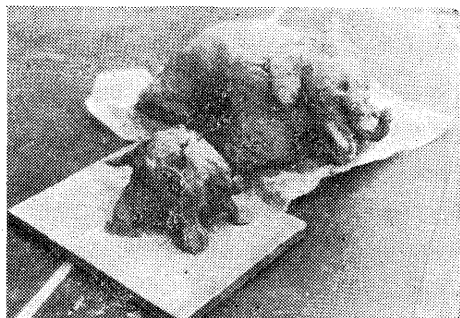
広場も無く、またいつ自動車ごとび出してくるか分らない東京ではこういうわけにはいかないが、幸に、私共の保育室の前庭は小じ

やりを敷きつめてあるので、そこに棒で大きい舟とかひこうきらしいものを書いて皆で遊るといふような、現在の環境なるが故に余り経験しない遊びを経験させた。これによって、庭は単に走りまわる場所というだけでなく、子どもたちにとってはこの上ない大きい造形活動の場としての価値を見出すことがで



大きなお絵かき

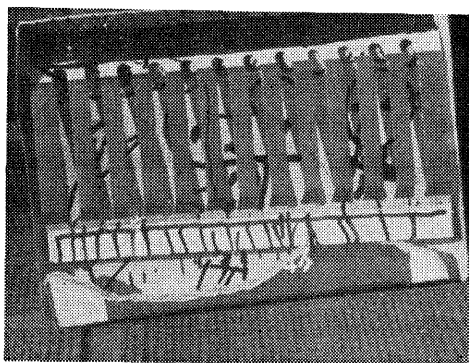
ねんどの象



きた。両手に二本の棒を持ってひっぱりあるいたあとに出来た線を、他の子どもたちが汽車の線路といひ出したことから、汽車ごっこが発展し、とうとう二本の棒をひっぱりあってるく人を「線路やさん」という名前をつけてしまったことなど、生活の中からとり上げた造形活動である。

その他、ねんど遊びを多く経験させた。暖かい時期はどろねんど、寒くなつてからは油ねんど、というように……これをとりあげたことについてもやはり積木などと同じく、

動物のおり



厚みなどもあり、身近に感じるであろう立体というものを主にしようとした考えからである。今はその結果はどうである、という時期ではないが、一枚の紙があつたとすると、何か立体的にしようという工夫をし試みるということがほのかに感じられる。

みだしに、導入ということばを使ったけれども、導入という教師側の計画の多分に入つた感じよりは、子どもの普段の遊びの中にあらわれた子どもの思いつきをとりあげたにすぎず、造形活動への導入などというのが



牛乳びん

恥ずかしいくらいである。

三才児の固まらない頭の中から、何の苦勞もなく出てきて、子どもらしい美しくしきによつてあらわされるものに驚きながら、それを次へすすむ道しるべとすることができた一年間であった。

* 富樫 純子 *

前年度一年間受け持った三才児の絵画製作について、実際にしたことを中心にしてふりかえつて考えてみたいと思う。

教師としては、絵画製作の面での幼児の発達段階をよく知っておき、それに応じた指導をするということが大切であると、考えた。

また三才児の絵画製作は、個人指導の場合が多いし、たいへん個人差があるので、実際に自分の受け持った幼児の実態をよく知り、その発達や特性を考慮して、絵画製作の目標を達成するように心がけた。

一応、絵をかくこと、物を作ることにについて考えて行きたいと思う。

絵をかくこと

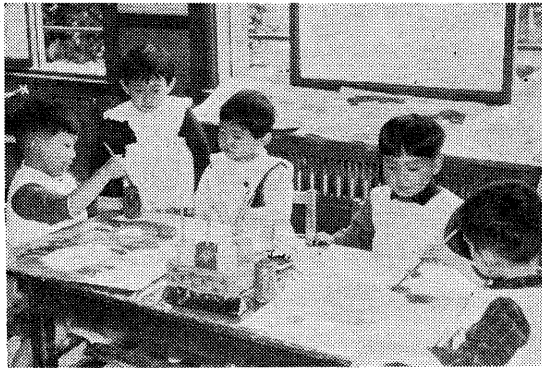
三才児の絵をかく指導は、自由にかいて遊ぶことに興味をもつようにすることである。絵をかくことは、自発的な表現活動をも豊かにさせ、創造的表現を通して、幼児の成長をたすけ、幼児が最も自由に自己を表現できる方法の一つであると考えられている。

このためには、適当な材料を使い、自由なふんいきの中での教師の適切な指導や助言が大切であり、環境を整えることも必要である。三才児の場合、幼稚園の生活になれるという目標もあるので、教師はその方面の努力や工夫をするし、また実際に絵をかいている

時の指導でも、いわゆる生活指導の面に属する指導をあわせてする時が多いわけである。

絵をかいている過程を尊重し、出来上がった結果を問題にしたり、重要視したりしてはいけなさと考え、素材の問題にしても、それぞれの機能を生かして、一つに定めないうどんな材料でも、幼児が自分の意志のままに使えるようにすることが必要であると思つた。

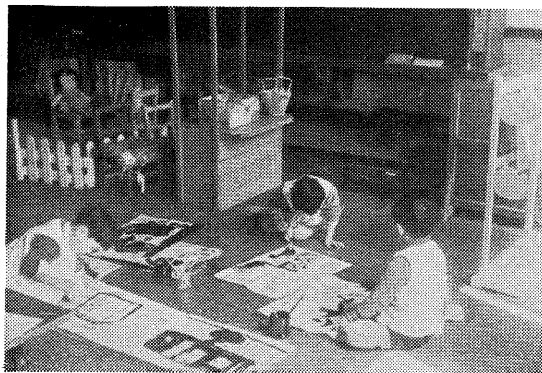
次に具体的に扱った材料について考えてみ

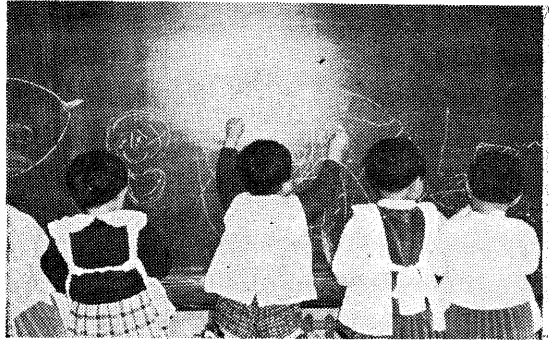


よう、

クレヨン・クレパス・鉛筆・チョーク・マジックインキ・ポストカードカラー・粉えのぐ・墨汁など。

筆も太いのや細いのを用意し、筆だけでなく、わりばし・指などでもかく経験を持たせた。使用した紙類も画用紙・模造紙・色模造紙・ラシャ紙・ケント紙・和紙・ハトロン紙・新聞紙・包装紙のうらなどで、なお紙の





大きき、紙の色にも形にも変化をつけるように留意した。目的により、それぞれ適した材料をえらんだわけで、例えば、フィンガーペインティングに適した用紙はつるつるとした硬質の紙でアート紙やケント紙・カレンダーの裏・ガラスなどがよく、墨汁などは新聞紙など使ったたんにかかせた。ポスターカラーなどの色の選び方・色のとき方などにも注意し、かく場所も床の平らな広い場所をかいた

り、机の上でかいたりした。黒板は、のびのびと安心していたがきが出来るようになっておいた。

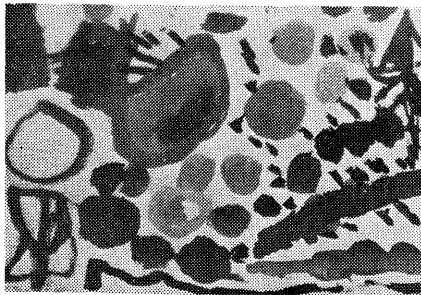
三才児に扱いやすい、親しみやすい適当な材料を描えて置いても、その指導の際はそれぞれの子どもによって違ってくることは当然である。子どもによっては、たえず励まさないければいけない場合もあり、子どもが自分で刺激をつくってかいている子どももあり、それぞれの子どもの特性をよく考えるように心がけた。仕事をやりとげようとするとする子ども心、がまえ慾求をよくみての教師の助言、ほめる場合でも、子ども作品を何もかもめっちゃめっちゃにほめないで、自分の気持とか経験を表現するのに成功したらほめるとか、前よりその子どもなりに少しでも進歩したらほめるとか、細かい心くばりも必要であ



る。また全部の子どもたちの作品を、保育室にかけられるようにすることも望ましいことと、これは、あわいながら他人の表現を認めさせることに役立つことであると思う。

子どもたちにも出来るだけ、たくさん違った材料を与え、三才児なりに、いろいろな経験を持たせ、より広い興味をもたせたいと考えて、フィンガーペインティング・デカルコマニー・フロッター・ジュエリー・そめ紙・砂絵・もみながら絵なども経験させた。

幼児の造形活動のための正しい刺激という点でも研究し、造形活動のよろこび、興味を

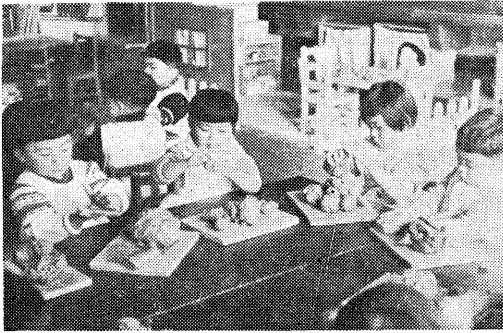


えのぐでラシ・紙にかいた絵

失わないように、紙なども出来るだけ豊富に使えたら理想的であると思っている。

物を作ること

三才児の物をつくる指導は、自由につくってあそぶことに興味をもつようにすることである。物をつくることは、物をつくることでの意欲を養い、創造的欲求を満たして幼児の成長をたずけることであると考えられている。年齢相応な適当な材料が用意され、よい環



境のもとで、教師の適切な指導や助言が重要なことは、絵をかくことの指導の場合と同じに留意しなくてはならないことである。素材の問題にしても、いろいろ教師の創意工夫により、幼児の創造性をのばすものを与えるようにすることは大切なことである。

次に具体的に扱った材料

について考えてみると、三才児に最も適した活動として、粘土あそび・砂あそびを充分に経験させた。粘土あそびは自己を表現しやすいものの一つで、子どもたちに喜ばれるものである。出来上りはぜんぜん問題にしないで、材料のもてあそび、いじくりを尊重して使わせた。粘土の大ききで束縛してはいけな

いと考へ、なるべく大きなものを与えるようにし、粘土は使いやすいかたさを与えるようにした。

砂あそびは、子どもたちにとって、自発的に好む遊びで、造形活動をさせるのに重要な役割をもつあそびの一つなので、これを出来る



るだけ活用した。三才児の興味の継続時間が長いのもこの砂あそびが一番であった。

この外、造形活動のよい材料として、積木、くみ木があげられると思う。その他、はさみ、紙類（画用紙・ラシャ紙・模造紙・色紙・ボール紙・包装紙・セロハンなど）・布切れ・毛糸・空箱・紙袋・自然物・わりばし・木片・石なども用意して適当に使わせる経験を持たせた。例えば、自由に紙を切ったり、ちぎったり、はったり、並べたりして遊んだり、簡単なおもちゃ（風車、電車かばんなど）をつくらせて遊んだり、空箱を利用して乗物をつくらせたり、おもんなども自由にかい

て、布、毛糸などの補助材料を利用してつくるようなこともした。一つ一つ細かい指導内容や、指導過程にまでふれられないが、三才児の場合、どこまでも自由にのびのびとつくり、いろいろな材料に親しませるといふところを主眼を置いた。

四才児

堀合文子

幼稚園教師は、幼児を画家や彫刻家など、専門の芸術家に仕上げるのでなく、平均に発達せる幼児を、そして将来への基礎を養うために教育している。絵画製作という面を通して、幼児の思う事、考える事を率直に表現させながら将来への創造性を養っている。

その絵画製作の指導にもいろいろある。このようにしないと幼児の創造性はつまれてしまう。このようにしないと幼児の創造性はのびない。いつも人形と花、自動車ばかり

画いているのは古い。のびない。また、紙でばかりこせこせ作ってはいは……。プリントしたものでやらせるのは……。などなど、いろいろな意見があり、いろいろの指導がある。いずれも専門家または画家・教育者が研究の結果、幼児の創造性をいかにのびすかを考えそれぞれ信念をもっていられる事で私共も大いに参考にしなければならない。

しかし私共の目の前には幼児がいる。そして常に幼児は活動し、生活している。私共はその幼児と常に生活していると、やはり幼児の発達段階、幼児の成長過程、幼児の興味、幼児の環境、幼児の表現というものが常に目に入ってくる。そして常に考えられる。また幼児は絵画製作だけの生活をしているわけではないので私共は広く、細かく目をむけて指導している。

それから年令に適應ということが大事で、やたらと教師の知識にまかせて幼児に与えては幼児は消化したようでもそれは無意味で、やはり四歳は四歳の適当な時期に適当な材料適当な指導がよりよく伸張する事を考え、いくつかの段階を考えて指導する。幼児の幼稚園生活を通しての計画、即ちカリキュラムを

立て、そして実践しながら幼児の成長過程を深く観察しながら進まねばならないと思う。

四才児としての絵画製作の方針

ひと口に言えば、四歳では十分に画く事を経験させ、画く事のたのしさを味わせ、興味を持たせたい。そして同時に積木あそび、砂あそび、を十分に満喫させたい。

四歳になると、ただ手の動きのおもしろさより、何かそこには目的が出てき、また自分の考えを表現しようとしてくる。たとえばそれが兄弟姉妹や友だちのまねでも何か形を表現しようとする知識的にも努力する。で、人形でも花でも、自動車でも、自分がすきで画きたいなら何度でも何回でもよい、大いに画かせたい。しかしその時教師は紙、画く材料にいろいろと変化を持たせ、その画くものがそれより一歩もでないものにならないように努力する。無理に人形はいけない、家はいけないというのでなく幼児の興味を他方面にむけるように努力する。しかしその材料として、紙の色、紙の大きさ、紙質などに変化を持たせるのはよいが、画く材料は即ち顔料はやはり一度にいろいろと与えるのでなく、段階が必要と思う。